第1話　夜空に舞うもの

「…取りあえず落ちる心配は無さそうね…」
あたしは少し冷静になって、足元を踏みしめてみた。
ふわりとした感じがして、これ以上、下がるような感じがない。
それを確認してから、あたしは周りを見渡してみた。
地平線の向こうまで見える高さにいることが改めて分かる。
そして、眼下に広がる町は間違いなくあたしが住んでいる町だ。
「あれはいつも行っている本屋だし…あそこにあるのはこの前服を買った洋品店だし…」
あたしは町を目を凝らして見下ろしながら、自分の知っている建物を列挙しだした。
「…って、こんなことしている場合じゃなかったっ！」
自分の通っている高校を指差したところでようやく我に返った。
「…問題はどうしてここにいるのかと、帰る方法よね…」
ふと気が付いたが、こんな上空に居るのに全く寒くない。
上空は強い風が吹いているというが、それを感じる事も無い。

今のあたしは、風のない空中で留まっている風船の如くの状態である。
「…分からない…何であたしここにいるの？」
とその時、気付いた事があった。
あたしの服はパジャマのままであった事だ。
「…と言う事は…」
常識で考えれば一つしかない解答をあたしの頭は導き出した。
「これは夢！　そう夢しかない！」
納得顔で高らかに宣言するあたし。
「な～んだ、夢かぁ～」
あたしは笑いながら星空を見上げた。
「寝る前に、星の本なんか読んだからこんな夢を見たのね」
その時、星以外の何か光るものが目に映った。
それは、ふらり、ふらりと揺らめきながらそれはあたしに向かって降りてきた。
「…羽根…？」
何かの鳥の羽根だろうか？
あたしに向かって一枚の羽根が降ってきた。

取りあえず今の現象についての考察を一瞬にして片付けたあたしは、再び上を見上げたが…
「あっ、あれ!?　いない!?」
先ほどまであたしの上で舞っていた何かはその場にはいなくなっていた。
あたしが上空に登っていたのはほんの一瞬の事だ。
その一瞬であたしの視界から消える事が出来るほどのスピードなんて、普通の鳥でも無理だと思う。
そう思ってあたしは、辺りを見渡した。
「あっ!?　いた…」
それは直ぐ（１０ｍも離れていない）そこにいた。間抜けなことにあたしはすぐに気がつかなかったけど…
それは人だった。
ただし、人の形をしている何かと言った方が正しいかもしれないけど…
ぱっと見だけでも、背中に翼が生えていると言うだけで既にじゅーぶん普通の人じゃ無いと思う…
あたしは横で未だに何かを舞っているそれをまじまじと見つめた。
白い肌…よく雪のように白い肌って良く言うけど、この人の場合白すぎて透き通るような白

…言うなれば白い光みたい…
その肌に、雲のような白い薄手の服を身に付けていた。
こんな上空でそんな格好をしていたら百発百中で風邪をひきそうだけど…
パジャマ姿の今のあたしがいえる事じゃないけどね…
背中から生えているその白い翼は、夜空に淡く光りを放っている。
あたしが手にした羽根もその一部だったのだろう、今もその翼から絶え間無く地上に羽根が舞い下りて行く。
そして…その表情はまさしく天使だった。
天使のやさしい笑みとは良く言うけど、この人の笑みは人を男女分け隔て無く引き付けてやまない何かを持っている。
かく言うあたしも、その笑みを見てくらっとしてしまった。
…あたし…天使が出てくる本とか読んだかなぁ…
あたしは、そのまま固まったようにその天使の舞を眺めていた。
よく見てみると舞を舞っていると言うよりも、自分の羽根とそしてその手に持っている淡く赤い光を放っている細い糸にじゃれているようにも見えるけど…
不意にその『天使』がこちらに顔を向けた。

プロローグ

例えば、夜空に浮かんでいる自分を想像してみる。
眼下に広がる光の海…街を彩るイルミネーション…必死に暗い何かを隠すように光る灯火…
そして、頭上に輝く星たち…
下からの光で多くは見えないけれど、それでも幾千を越える星たちが自分達の存在を示すかのように光り輝いている…
その中にパラシュートも、グライダーも無くただ宙に浮いている自分…
「そう、こんな感じ…」
あたしはぼんやりとその空を眺めていた…
「…って、何であたしがここにいるのぉ!?」
そう、あたしはその場に居た。
あたしの足元には何も無い。
つまり、言葉通り空に浮いているのだ！

思わずあたしはその羽根を手に取ってみる。
「綺麗な羽根…どんな鳥の羽根なんだろう…」
あたしの手に落ちてきたその羽根は、まるで真珠か何かの宝石のような白い輝きを放っている。
あたしがその羽根を見つめていると視界の端を同じように光る何かが上から通り過ぎた。
そちらに視線を向けると、その光るものは手にしている羽根と同じ物だった。
再び頭上に視線を戻すと、あたしに向かって無数の羽根が舞い下りてきていた。
「わぁ～！」
あたしは美しく舞い下りる羽根に両手を伸ばしながら、その光景を見つめていた。
「すっごく、綺麗…」
あたしは溜め息交じりに呟いていた。
羽根は絶えるどころか、次第に密度を増している。
「どこから降って来るんだろう？」
あたしは再び上を見上げると、舞い落ちてくる羽根を避けながら、それらが落ちてくる一点に目を凝らした。
そして…星の輝く夜闇の空の中で…あたしはそれを見た…

あたしを取り巻いている羽根たちが舞い来るその一点には、白く輝く何かが動いている。
盛んに動き回っているそれは、何かの踊りのようだ…
その何かがその場で舞うたびに、あたしの周りが羽根で満たされゆく。
しかし、ここからではそれ以上の事は分からない。
「う～…もっと近ければ良く見えるのに！」
あたしは上を見上げたままもどかしげに呟いた。
だが…次の瞬間…
　ぐうっん！
あたしの体は今の場所よりも更に上に舞い上がっていった！
まるで巨大な掃除機に吸い込まれるように上空へと体が持ち上げられる。
「のぁぁぁぁ～!?」
けれども次の瞬間には、スイッチが切られたように急停止し、再び宙に留まった状態になった。
「…さっすがぁ！　あたしの夢！　あたしが願えばそのとおりになるのね！」
今の現象は夢の中の一出来事として片付けるあたし。
…冷静に考えると、いくら夢でもそんな思い通りになるはず無いんだけどね…

そして何事もなかったようにあたしにその笑みをむける。
「あはっ、あはははははー…」
突然の事にあたしは思わず乾いたような笑いを返してしまった。
はっきり言ってこの笑みで「私のために死んでね」なんて言われたら、世の男どもは惜しげもなく命差し出すわね…
今時居ないよこんな、歪んでそうもない清楚な女性なんて…
その人は今もあたしを見つめたまま、微笑んでいる。
「えっと…ここで何してるんですか？」
めちゃくちゃ間の抜けた質問をしてしまった。
あたしの問いに首を少し傾けながら、あたしに近づいてきた。
かといって翼がはためいているわけではなく、そのままの姿勢で平行移動してきた。
これを暗闇とかでやられたら怖いわね…
あたしのすぐそばまで来ると、そっと左腕を差し出してきた。
「え…あ、はいはい…」
めちゃくちゃ罪作りな表情そのままに微笑みかけているその人に、あたしも手を差し伸べてしまう。